

# 勿凝学問 381

年金経済学者のライフ・サイクル

卒論で年金を勧めない理由と一度だけ修論で許してしまった理由

2012年5月8日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

5月1日に書いていたことを、ここにまとめておきます。卒論のテーマで悩んでいる者たちは、毎年、これを読んでおいてください。

さて、5月に入ったから、4年生は卒論の報告をはじめておくれ。

今年の4年は13期だから、これを言うのは13回目かな——「卒論で年金はやめておきな。あれは君らを賢くしてくれない（笑）」

次を読んでごらん。

- 太田啓之氏「[年金破綻論のまやかし](#)」『AERA』2012年4月9日号（2日発売）
- 太田啓之氏「[年金大誤報にダメされるな](#)」『週刊文春』2012年4月26日号（19日発売）

〔執筆者より掲載許可を頂いています〕

どうして、こういうことが起こるのか<sup>1</sup>？

ヒントは、私が2003年に書いた次あたりにあるかもしれません。

- [年金経済学者のライフ・サイクル](#)「年金改革論議の政治経済学」『再分配政策の政治経済学Ⅱ』より

新規参入してきた年金経済学者は、まず民営化・積立方式論者として登場し、景気変動をはじめとした経済の歴史を自ら体験していくうちに、勇気をもって前言を翻すか、もしくは口をつぐんで年金の研究から去っていく。こうした年金経済学者のライフ・サイクルを20年ほど観察していれば、年金に関して<持久力のある見解>とはいかなるものか、自然と学習できる。

この論文の参考文献に挙げていたもので、公開されているのがありますので紹介しておき

<sup>1</sup> 年金をちゃんと勉強したい人は次をどうぞ。

太田啓之『[いま、知らないと絶対損する年金 50問 50答](#)』文春新書

ます。

- 高山憲之氏(2002)「[最近の年金論争と世界の年金動向](#)」
- Orszag and Stiglitz(1999), [Rethinking Pension Reform: Ten Myths about Social Security](#).

年金の経済分析は、高山先生が書かれている「合成の誤謬」や、高山先生、Orszag and Stiglitz が揃って言っている「同等定理」の世界に落ち着いています。2003年に書いた私の論文の中でも、これらふたつの話をしています。

そして「年金経済学者のライフ・サイクル」の話を書いた時には、私は、かつて積立方式論者だった高山先生が、八田・小口先生が積立方式を唱えた『年金改革論』を批判した次の書評も読んでおり、かつて『年金民営化への構想』を書いていた小塩先生が、次第に論を変えてきている姿も観察していました。

- 高山憲之氏「[科学的装いを凝らした八田氏の”信念の表明”書 公的年金積立方式化への疑問](#)」

年金というのは、そういうものです。

先週の4月24日に社会保障審議会の年金部会で、年金の世代間格差や財政方式について議論をしたようです（[資料](#)）。そこで小塩委員からは、「積立方式に移行しても世代間の格差の是正にはあまり効果はない」という、同等定理を踏まえた発言がありました（4つ、5つのチャンネルから得た情報）。高山先生が八田・小口先生の『年金改革論』について目配りが足りないと指摘された「世界で展開されている年金論争」の動向を知っている人からみれば、私的扶養を社会化する過程で観察される年金制度内部の世代間格差を消すためには第一世代の負担を引き上げるか給付を下げるしか方法がないことは、分かりきっていることです。さらには仮に積立方式の年金が実現できたとしても、それは、少子高齢化の影響から自由ではいられない。

年金というのは、数年周期で、天動説を唱える若い論者が現れるのだけど、次第にその論者の論が変化していく世界——こういう対象は、君らが思考力を鍛えるための卒論のテーマにするには、実に不向きなわけです。

新春特集 インタビュー「[大切なことは考え抜いた制度を作ること](#)」『年金時代』  
2012年1月号 (No. 604号)

どうも年金論には、天動説と地動説の二種類があるようなんですね。頭を使わずに、ただ眺めただけでは、年金は、未納が増えると破綻し、莫大な超過債務があって、積立方式にすれば高齢化に耐えられ、財政が破綻しているから支給開始年齢引上げが言われている、みたいに見える。でも、少し考えれば、これは全部

大ウソだと分かる。僕の言う、年金論の天動説と地動説の違いです。

そう言えば、話が変わりますが、ご親切に、「厚労省資料（世代間格差に対する反論）の簡易検証」というのを送って下さった方、ありがとうございました。

25-27 頁の参考資料は、「計算技術的な問題点②」の「割引率」に関する 5 頁の次の記載に関する参考資料ですね。

- [社会保障の正確な理解についての 1 つのケーススタディ ～社会保障制度の“世代間格差”に関する論点～](#)

社会保険の負担は、一般に給与の一定率などで負荷され、賃金で伸びる。給付にもその構造が入るため、賃金の伸びと大きな乖離はないと考えることができる。それを賃金以上の数値で割り引くと、拠出に比べて、遠い将来で受給する給付額の方が小さな額で見なされ、拠出と給付の関係はマイナスの方向に働く。

※ 〔本資料末 25-27 頁、参考資料 1 「具体的な計算例」参照〕

25 頁に書いてあるように「人口構成が同じと仮定」しても、割引率の置き方次第で給付／負担の倍率が 1 を切ることを示しているところでしょう。割引率の選択という技術的論点を抽出するために「人口構成が同じ」という条件の下で考察する際に、人口構成を変えてはダメですよ。ご連絡下さった方も指摘されているように、「簡易検証」の読者の多くも、んっ？批判になっていないと思われたでしょうね。

人口構成が年金に与える影響については、経済学者は、従来、サミュエルソン・アーロン・パラドックスに基づく「人口増加率  $n$  の低下が積立方式と賦課方式の優劣に与える示唆」は本当なのか？という形で議論をしてきたわけですけど、そのあたりの詳細に関心のある人は、先の Orszag and Stiglitz 論文や、Nicholas Barr や Peter Diamond などをご参照下さい。Barr なんかは 1970 年代から議論してきたことを無視してしまったら、少しかわいそうですね。

まあ、今年 1 月の次のインタビュー …… 以前よりも意味が分かるようになったかもしれません。

新春特集 インタビュー「[大切なことは考え抜いた制度を作ること](#)」『年金時代』  
2012 年 1 月号 (No. 604 号)

あれから八年、いくつか見えてきました。一つは、新聞・経済誌のメディア人は勉強するということ、メディア人のほうが年金研究者や年金批判で名を上げた政治家よりも地頭が良いということが明らかになりました。

…

研究者の一人として残念なことはある。かつて天動説に立って年金論議に火を

付けていた学者も、よく勉強していた。国際的な年金研究の動向も把握されていて、だからこそ、天動説に基づく自分のトンデモ年金論を自己修正されることが多々あったし、少なくとも彼らの参考文献は、僕らにも役に立った。でも、最近のお騒がせ学者の参考文献は、お仲間内のものばかり。だから、天動説を言い続けることができるんでしょう。学者の一人としては寂しいことだけど、年金経済学者が記者たちの見識に完敗している。

次もどうか。

- 「[誰が何を間違えたのか](#)」『週刊東洋経済』2009年10月
- 勿凝学問 260 [フリードマン的批判とは？—制度への理解に自信のない者とエセ研究者がよく使うお手軽な手段](#)

注) 実は、ウン年前に指導教授として大学院生に年金研究を許したことがある。彼は、学部の際は黒田昌裕先生のゼミの学生で、黒田先生が退職する際に、私が院生として引き受けた次第。黒田先生から、「年金をやりたいと言っている学生がいるから、大学院でよろしく頼むよ」と言われたから・・・ハ、ハイと答える。

彼が僕のところに来て、2年目の4月頃かな。予想通り、年金ではよほど勘違いしないことには論文が書けないと悶々としていた彼を研究室棟の1階に呼び、僕は一言——「年金で、意味のある研究はあるにはある。それをやるか？」。

そうして彼がまとめた修士論文は、次の私の文章の参考文献にあります。

「[公的年金における世代間格差をどう考えるか——世代間格差論議の学説史的考察](#)」

[LRL(Labor Research Library), 2006年, No. 11, pp. 3-6]

参考文献

伊藤亮太(2006)『相続財産の世代間格差の推計——公的年金世代間格差論への一視座の導入』慶應義塾大学大学院商学研究科修士論文 平成17年度

\*亮太は、FPとして、僕よりもはるかに有名人になってるみたいだな。ツイッターのフォロワーが6,188人もいるじゃないかい(笑)。

忙しいだろうが、いつか時間を作って、この修論は世に出した方がいいだろうな。「仕送り」とかもいろいろと計算しているわけだから、論文のタイトルも少し工夫した方がいいかもな。